

Ⅳ. 文献・資料紹介

臨時教育審議会と新聞報道

－ 第一次答申と「審議経過の概要（その3）」について －

千葉大学 天 笠 茂

1. はじめに

本稿での中心的な作業は、臨時教育審議会でまとめられた答申や審議経過の概要に対して、新聞各紙が何をどのように報じ、何を主張したか、という点を整理し、コメントを加えることにある。

周知の通り、臨時教育審議会を中心に教育改革について論議が積み重ねられている。今だ、その内容と方向に不明瞭さを残しているが、今後の推移について注目していく必要がある。その一方、審議の推移もさることながら、それを報じる新聞の動きにも興味をひかれる。各紙は臨教審に関してすでに数回にわたって社説を掲げているが、教育改革の世論形成という点について新聞各紙はどのような役割を果たしているのだろうか。

この点より、臨教審の審議をめぐる新聞各紙が何をどのような姿勢で報じているかを追ってみたい。そのために、ここでは、第一次答申と「審議経過の概要（その3）」（以下「概要（その3）」）について全国紙として発行部数も多い＜朝日＞、＜サンケイ＞、＜日本経済（以下、日経）＞、＜毎日＞、＜読売＞、の五紙がどのように取りあげたかを見ることにする。もとより、本稿で意図するところは、教育改革における新聞報道の役割を考察するために必要とされる新聞資料の収集、整理にある。以下、第一次答申と「概要（その3）」が公表された翌日の新聞を中心に、①第一面の見出し、②連載特集のテーマ、③答申あるいは「概要（その3）」の要旨の扱い方及び関連資料、④社会面の見出し、⑤社説、の5つの点から整理することにする。なお、各紙ともいずれも東京版である。

2. 第一次答申について

第一次答申は、1985（昭和60）年6月26日に中曽根首相に提出され、公表された。翌27日の各紙の朝刊は、一斉にその内容を伝えるとともに各界の動きを数頁にわたって報じている。また、数紙は、以後数日にわたって特集を組んでいる。6月27日の各紙朝刊を中心に第一次答申がどのように報じられたか整理してみよう。

① 第一面の見出し

臨教審が第一次答申を提出したことを、各紙はともに第一面で扱っている。各紙の見出し文

を取り出し、整理してみると以下の表のようになる。見出し文は、何を報じ、主張するか、報じる側の意図や内容が集約され、端的に表現されたものとしてとらえられる。各紙の見出しを見てみよう。

朝日	<ul style="list-style-type: none"> 個性重視の教育提唱 基本法の枠内で推進 選択の機会を拡大 六年制や共通テスト 「徳育」も強調 具体化へ閣僚会議 文部省には「改革本部」 	日経	<ul style="list-style-type: none"> 個性・徳育重点に教育改革 学歴社会を是正 六年制中学，単位制高校も 来月初め推進本部 教育改革へ文部省設置
サンケイ	<ul style="list-style-type: none"> 個性重視し創造性育てよ 学歴社会の是正を 大学入試に「共通テスト」 教員資質問題は持ち越し なるか，改革の突破口 問われる首相のリーダーシップ 	毎日	<ul style="list-style-type: none"> 個性重視を原則に改革 「学校に人間性改革」 共通テスト創設を 「6年制」など中・高多様化 関係閣僚会議を設置 不鮮明な改革像 自由化論争の火ダネ残る
読売	<ul style="list-style-type: none"> 個性重視の教育を 「共通テスト」創設 6年制など中等教育を多様化 		

《解説》各紙のトップの見出しは、いずれも「個性の重視」である。臨教審が教育改革の原則として個性重視を掲げたことに各紙とも強い関心を示したことがあらわされている。一方、具体的な改革課題については、「共通テスト」をあげているのが<日経>をのぞく各紙、また、「六年制中等学校」をあげているのが<サンケイ>をのぞく各紙である。このように、各紙にはほぼ共通して見られる見出しは、「個性重視」、「共通テスト」、「六年制中等学校」の三者である。そして、見出しの構成は、「共通テスト」や「六年制中等学校」など具体的な改革課題の提言にも注目するが、まず何よりも教育改革の原則が何であるか、この点を重視したことを示している。

また、見出しの表現として、第一次答申の基本的な性格と内容を伝えることに重点をおいたのが<朝日>、<日経>、<読売>の三紙である。これに対して、<毎日>は「不鮮明な改革

像」と第一次答申について評価を加えた見出しを掲げている。また、＜サンケイ＞では、「問われる首相のリーダーシップ」と答申の内容にとどまらず、今後の教育改革の推進に関係する見出しが見られる。このような点もあるが、全体として見出しの部分を見ると、第一次答申について評価を加える表現は避けて内容を伝えようとする各紙の抑制した姿勢が認められる。

② 連載の特集

各紙とも、6月27日朝刊から3回（＜日経＞の場合は5回）にわたって第一次答申をめぐる特集記事を連載している。そのテーマと各回の見出しを整理すると以下の表ようになる。

朝 日	<p>「“三つの視点、臨教審第一次答申”</p> <p>(上) 消えた言葉 新理念模索し挫折 結局、基本法に立ち戻る</p> <p>(中) 残った芽 底流に「自由化」論 衣替えして「規制緩和」</p> <p>(下) 見落とした課題 「国の責任」論議半ば 財政問題も政府にゲタ</p>
サ ン ケ イ	<p>「どう進む教育改革 臨教審一次答申をめぐる」(座談会)</p> <p>(上) 答申の読み方</p> <p>“文部省のワク越えていない”</p> <p>“共通テストいぜん問題残る”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・改革案を急ぎすぎた(加藤 寛) ・まあまあの出来栄え(木田 宏) ・ややきれいごとすぎる(俵 孝太郎) ・人間の能力計る方法を(天谷直弘) <p>(中) 自由化論議とは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個性重視は教育の原点(天谷) ・逆用されない言葉を(木田) ・競争で教育の質は向上(俵) ・画一的なものに反省を(加藤) <p>(下) 臨教審の今後</p> <ul style="list-style-type: none"> ・規制緩和の進め方が課題(天谷) ・自由より責任を考えよ(木田) ・悪徳教育産業の追放を(俵) ・新しい部会つくる必要(加藤)

日 経	「臨教審に聞く」 ① 天谷第一部会長 個性重視 各論はこれから ② 石井第二部会長 学歴社会 提言実行働きかけ ③ 有田第三部会長 徳育 価値観強制とは別 ④ 飯島第四部会長 受験地獄 機会複数化は実現 ⑤ 石川会長代理 理念と現実 気長に改善図る
毎 日	「動き始めた教育改革」 (上) 首相の不満 共通一次「廃止」に執念 (中) 「聖域」攻防 「行革」の枠内か外か (下) 陰の争点 「日教組」意識する自民
読 売	「動き出す教育改革 臨教審答申を生かすには」 (上) 消えた自由化 決着、首相の一言 (中) 学歴社会の打破 厚い「信仰」のカベ (下) 共通テスト 具体像まだ不明

《解説》「どう進む教育改革」＜サンケイ＞、「動き始めた教育改革」＜毎日＞、「動き出す教育改革」＜読売＞、などのタイトルにも示されているように、教育改革の動きについて今後の推移を模索する姿勢が見られる。＜サンケイ＞の臨教審に關係する委員による座談会、＜日経＞の各部会長や会長代理のインタビュー、などもそのあらわれである。關係する委員が教育改革について何を言い、何を考えているか、直接話を聞き出して今後の動きを探る試みとして見ることができる。

一方、＜毎日＞をのぞく各紙が、いわゆる「自由化論議」を追っている。それを通して、今回の教育改革の理念や原則が何であるのか、その内容と議論の経過を追う姿勢が見られる。だが、この時点では、教育改革の原則と「共通テスト」や「六年制中等学校」などの各論とがどう結びつくのか、といった点からの掘り下げた考察は十分になされていない。

もっとも、この時点では、各紙に教育改革の動きについて模様を眺めるという姿勢が見られなくもない。今回の教育改革の理念や原則は何か、それはどのような意義と問題点を持つのか、各論と結びつけながら浮彫りにしていく工夫と掘り下げた考察が欲しかったように思われる。

③ 第一次答申の紹介

④ 原文の扱い

各紙とも第一次答申の要旨をのせ、原文の一部を紹介しているが、省略する部分が異なるなど扱い方に特色が見られる。以下、二つの例をあげる。

まず、原文の「はじめに」には次の一部がある。

今次教育改革の成否は、第一に政府の対応いかんによるが、ひとりひとりの教師、ひとりひとりの親、すべての教育機関および学ぶ者自身を含めて教育に関係する者と全国民の改革への意志、子どもや孫たちへの愛情と責任感にまつところが大きい。二十一世紀を目指す教育改革の成功のため国民各位の深い御理解と御協力を訴えたい。

この原文のまま紹介してあるのが<朝日>、<日経>、<毎日>の三紙である。これに対して、<サンケイ>は、「二十一世紀を目指す教育改革の成功のため国民各位の深いご理解とご協力を訴えたい」という原文を、「国民の深い理解と協力を訴えたい」と短く省略してのせている。また、<読売>の場合は、「二十一世紀を目指す…訴えたい。」の部分については省略せずにのせているが、その前の「今次教育改革の成否は、…まつところが大きい。」の一文はすべて削除されている。後にふれるところであるが<日経>は社説にこの一部を引用してコメントを加えるほどに注目する姿勢を示している。これに対して、<読売>は省略する扱いをしており、第一次答申に対するとらえの微妙な相違が認められる。

次に、第一部教育改革の基本方向、第一節教育の現状、の部分についてみる。ここには次の一節が述べられている。

(1)我が国の教育は、教育の機会均等の理念の下に、教育を重視する国民性や国民の所得水準の向上などにより著しく普及し、我が国社会の発展の原動力となってきた。このような成果をもたらした我が国の教育は、諸外国と比較して、初等中等教育の水準が高く、その結果、全般的に知的水準の高い国民が育成され、また、高等教育においても著しく進学率が上昇し、国家、社会の発展と国民生活や文化の向上に寄与してきた。これらの諸点は、国際的にも評価されている。

この原文のまま掲載したのが<日経>、<毎日>、<読売>、の三紙である。(なお、<日経>の場合、なぜか「国民性や」の四文字が落ちている)。これに対して、<サンケイ>の場合、「教育を重視する国民性や国民の所得水準の向上などにより」、「このような成果をもたらした我が国の教育は」、「これらの諸点は、国際的にも評価されている」、の三つの文章が削除されて紹介されている。

また、<朝日>の場合は、この部分を「わが国の教育は、教育を重視する国民性や国民の所得水準の向上などにより著しく普及し、社会発展の原動力となってきた。」と原文を省略して短くのせている。

要旨を掲載する以上、原文の取捨選択の作業が入ってくるわけであるが、上述のように各紙によって扱い方の相違を認めることができる。何げなく掲載されている要旨にも第一次答申に対するとらえ方の違いが映し出されているようである。しかし、ここで重視されるべきことは何よ

りも原文の正確な伝達であろう。掲載する側には、読みずらくなならない範囲で削除した部分を明示するなど原文を大切にす姿勢が求められる。また、読む側にも、この点を十分にふまえ、できるだけ原典にあたることを大切にすべきである。

⑥ 関連する資料などの掲載

第一次答申要旨の紹介とともに<サンケイ>をのぞく四紙は、関連の資料、論説文、などを掲載している。それを整理したのが以下の表である。

朝 日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 審議会の顔ぶれ（委員，専門委員の名称，所属，年齢） ・ 審議の回数と時間 ・ 教育史年表「近代日本の教育の歩み」 ・ 用語の解説（学制，教育基本法，四六答申） ・ 解説記事「初会合から答申までの審議の回数と時間」 ・ 解説記事「学歴社会論争で辞意騒ぎも」 ・ 解説記事「イライラつづらす専門委員」
サン ケイ	なし
日 経	<ul style="list-style-type: none"> ・ 潮木守一論文「答申を読んで 急ぎ過ぎの感 生涯学習 社会的合意を」
毎 日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 西尾幹二論文「答申を読んで 実現性乏しく，総花的」 ・ 臨教審の顔ぶれ（氏名，所属） ・ 臨教審の歩み（成立から公聴会の開催等の経過） ・ 図「臨教審第一次答申にみる中等教育の多様化構想」 ・ 解説記事「“普通科偏重”の是正ねらう 大学側の対応が課題」 ・ 解説記事「輪切り－序列化の解消図る とけるか，私大の警戒感」 ・ 解説記事「学歴社会解体への生涯教育 具体的な提言は先送りに」
読 売	<ul style="list-style-type: none"> ・ 天野郁夫論文「教育荒廃，乏しい解決策 答申急ぐより深い論議期待」 ・ 年表「わが国の学校教育制度の歩み」 ・ 解説記事「明治，戦後に次ぐ改革 — 画一・硬直化の弊害，打破めざす — 」

《解説》 <日経>，<毎日>，<読売>の各紙は論説文を掲載している。<日経>は潮

木守一「急ぎ過ぎの感 生涯学習 社会的合意を」、＜毎日＞は西尾幹二「実現性乏しく、総花的」、＜読売＞は天野郁夫「教育荒廃、乏しい解決策 答申急ぐより深い議論期待」、である。いずれも第一次答申に対して内容及びとりまとめの性急さに批判的な論述がなされている。この種の論説文が要旨とともに大きな活字の見出しで掲載されると、それだけで要旨を読む側に一定のイメージを形成する働きをなす。各氏の指摘は適切であったか。これら論説文の適切さについても改めて検討されなければならない。

ところで、＜朝日＞や＜読売＞は、教育史の年表をのせるなど、臨教審による教育改革の歴史的な位置づけを説明しようとしている。また、＜朝日＞は関連する教育用語の解説をのせるなど、日頃、教育関係の用語に馴染みのない諸者にも配慮した跡がうかがえる。原文要旨の掲載と、とかく無味乾燥になりがちな紙面に読者の関心をひきつける工夫が、とりわけ＜朝日＞、＜毎日＞、＜読売＞の三紙に認められる。

④ 社会面の見出し

各紙の社会面の見出しは、以下の表の通りである。

朝 日	<ul style="list-style-type: none"> ・政治に追われ見切り発車 ・臨教審答申 内部から異論や不満 ・内容に責任持てぬ ・技術論ばかり前面 ・「自由化」も不完全燃焼 ・願いに答えず受験戦争に輪 女性民教審が批判 ・列島インタビュー ここが問題 ここに注文 	日 経	<ul style="list-style-type: none"> ・受験地獄どこまで解消 ・共通テストで科目削減 ・「二次」の重み増す
		毎 日	<ul style="list-style-type: none"> ・難産の論議571時間 ・臨教審答申「不協和音」ひきずり ・もつれもつれた改革理念 ・共通テスト 私大冷たく
	サ ン ケ イ	<ul style="list-style-type: none"> ・6年制中等学校には「及び腰、東日本18都道県の教育長にアンケート ・「前向き」は東京だけ ・受験エリート校化を心配 ・「共通テスト」私大は冷淡な反応 ・学長回答「没個性、序列化の恐れ」 	読 売

《解説》 アンケート調査やインタビューによって第一次答申の反響を扱った紙面や、臨教審内部の審議の経過を中心に扱った紙面などが見られる。紙面の構成や内容にそれぞれ特色が

見られるが、各紙より共通して読み取れることは、第一次答申に対する社会的反響がはかばかしくないことである。各紙は、第一次答申をめぐって臨教審内部にも異論や不満があったり、社会的にも反発や冷淡な反応が存在していることを伝えようとしている。

もっとも、いわゆる「識者」をはじめ、どれほど第一次答申を読んだ後のコメントであったのか、問題を感じなくもない。社会的な反響を伝える意図で紙面を構成するためには、社会の各層にアンテナを張って多くの情報を収集する、という姿勢を大切にすべきことは言うまでもない。

⑤ 社説

第一次答申の新聞報道について最後に社説について整理する。各紙の主要な主張点を整理したのが以下の表である。表は、積極的であるか消極的であるかはともかくとして評価している点について、また、批判点あるいは要望する点に分けてある。「批判点」と「要望点」の区分はかならずしも明確に一線を引けるものではないが、とりあえず表のようにした。また、教紙は臨教審の組織・運営についてもコメントを加えているので、その欄も表の下につけ加えた。

	<朝日> 展望ひらけめ 教育改革	<サンケイ> 臨教審答申 への評価と社説	<日経> 一応整理ついた 臨教審第一次答申	<毎日> 疑問の多い臨教 審一次答申	<読売> 「すべては、こ れから」の臨教審
評価点		「臨教審が日本の教育の現状や問題点をどうとらえ、改革の方向をどこに求めようとしているかという総論ないしは基本的スタンスともいうべきものが示された。……概略図としてみればおおむね適切で、納得できる内容と思う。この点は評価したい。」	「一応整理され、改革の基本方向も明らかになり、今後の主要課題も発表された。臨教審本会議、特に運営委員会の努力は評価しよう。」 「第一次答申の前書きには、『教育改革の成否は第一に政府の対応いかんによるが教師、親、学生・生徒、児童の改革への意志と責任感にまつところが大きい』とある。これは賛成である。」		「『良の下』つまり『合格点すれすれ』は、この答申に対するまずは妥当な評価と言えそうだ。」 「答申を通読すると、さまざまな論点に目を向け、注意深くバランスに配慮していることがうかがわれる。」 「ここに至る経緯で、従来の審議会に比べて審議の公開度が非常に高かったこと、事務局のおぜん立てに頼らない運営をしたこと、精力的に審議したことは評価しておきたい。」
(批判点)	「いまの教育がおちいっている八方ふさがりに似た状態に風穴があき、あかろい展望が開かれた、という感じを与えてくれるものではない。」 「もっともなことが書かれてはいるが、…結局のところ、どこから、どう手を着けようというのか、大きな方向性が浮び上ってこない。」	「具体的改革提言が出された。…率直にいうとそれほど緊急性のある提言とも思われない。…拙速を避け、もっと時間をかけて取り組むべきだったと思う。」		「全体として見ると、十ヶ月近い審議の成果としては、粗雑な印象を受ける。」 「内閣直属の大規模な審議会として教育改革に取り組んでいるのだから、この程度の答申では困る。」 「総論だけでなく、各論との違いも目立つ。」	「バランスと引き換えに力点が薄められた印象も否めない。」
(要望点)	「意見の違いがある以上、菅原の妥協でこまかして通らず、今後の審議ではきちんと議論をしながら、国民に判断の材料を提供しよう、あらためて要望したい。」 「これからは本当に重要な検討課題を的確に選び、構造的な議論を組み立ててほしいものである。」	「今回の答申で指摘した問題点をさらに深く掘り下げ実態を洗い出し、精密に分析を加えてほしい。そうした基本作業にもう一度たかえるところから、改革の全体像を描き出す努力をして欲しい。」	「いずれテーマはしぼられてくるだろうが、是非審議して欲しい項目をあげるとすれば、生涯学習の組織化、初等中等教育の充実・多様化、教員の資質向上あたりだろうか。」	「国民の期待に少しでもこたえよう、これからの審議方針を立て直してもらいたい。」	「基本答申に向けて、具体的なテーマをこなしながら『自由化論議』は、今後大いに詰める必要があるわけだ。」
組織・運営について	「『素人』なればこそ、そうした謙虚さ、誠実さの伝わってくる審議を、いま一度要請しておきたい。」		「専門委員や参考人の活用も必要であり、課題によってはいまの内部会制以外の審議体制も考えられよう。」	「部会の再編や専門委員の見直しも進めたらどうか。」 「第一次答申を広い意味で基本答申の中間答申ととらえ、その判断を基本答申への審議に生かすことは考えられないか。」	「部会の構成、総会の運営や専門委員の扱いなど反響点も少なくないことを思う。今後は、より構造的に討議する機会を増やしたり、新たなプロジェクトに取り組み構成を考えるなどの工夫も必要だろう。」

《解説》 「運営委員会の努力は評価しよう」<日経>、「『良の下』つまり『合格点すれすれ』は、この答申に対するまずは妥当な評価といえそうだ」<読売>、など積極的評価とは言えない評価が目立つ。肯定的に評価するにしても、やや躊躇しながら評価している姿勢が見られる。

その一方、「もっともなことが書かれてはいるが、…大きな方向性が浮び上がってこない」<朝日>、とか、「全体としてみると…粗雑な印象を受ける」や「この程度の答申では困る」<毎日>、と、第一次答申に対する批判はなかなか手厳しい。消極的な評価に対して厳しい批判が目立つ。

また、次のように、今後に期待するという形で要望が多くあげられているのも今回の社説の特色である。すなわち、「本当に重要な検討課題を的確に選び、構造的な論議を組み立ててほしい」<朝日>、「改革の全体像を描き出す努力をして欲しい」<サンケイ>、「是非審議してほしい項目をあげるとすれば、…教員の資質向上あたりだろうか」<日経>、「審議方針を立て直してもらいたい」<毎日>、「『自由化論議』は、今後大いに詰める必要がある」<読売>、など、要望することが目立つ。それだけ、第一次答申に対して各紙に不満のあることが示されているといえる。

ただ、批判や要望の多さにくらべて、具体的な提言は極めて少ない。その数少ない提言も、教育改革の内容や原則についてよりも、審議会の組織・運営にかかわるものである。世論形成の一翼を担っている以上、出来上がったものを批評するだけにとどまらず、建設的な提言を行っていく積極的な姿勢がもう少しあってもよいように思われる。

3. 「審議経過の概要（その3）」の場合

1986（昭和61）年1月22日に「審議経過の概要（その3）」が公表された。翌23日の各紙朝刊は、それをめぐる動きや解説を第一面から社会面まで数頁にわたって報じている。周知の通り、「概要（その3）」は全部で21万5千字にのぼる大部なもので、そこにのべられている内容は広範かつ多岐にわたる。それをどう処理して内容と特色を報じるか、まさに各紙の腕の見せ所である。「第一次答申」の場合と同じように各紙の報道について、1月23日朝刊を中心に第一面から見えていくことにする。

① 第一面の見出し

「概要（その3）」が公表されたことについて各紙とも第一面で扱っている。各紙毎に見出しを整理すると次の表のようになる。

朝 日	“教育の規制緩和を提言” ・臨教審が第2次答申素案 ・新任教員に1年研修 ・大学入学春秋2回に ・適性審はさらに検討	毎 日	“「初任者研修制」を提唱” ・臨教審が「審議経過の概要（その3）」 公表 ・「教員に1年」義務化 ・大学院を充実 在学年限短縮も ・「適性案」なお検討
サ ン ケ イ	“初任者研修制度を導入 臨教審が中間報告” ・質向上へ義務づけ ・文相への助言機関創設も ・問題点はすべて先送り	読 売	“教員の「初任者研修」導入” ・臨教審審議経過の概要公表 ・大学入学春秋2回 年齢制限も再検討 ・4月答申「適性案」持ち越す
日 経	“「自律の精神」育成 審議経過の概要 臨教審が公表” ・大学の年限弾力化 ・新人教員の1年研修		

《解説》 トップの見出しは、改革の具体的課題を報じたものと改革の理念を報じたものと二つに分けられる。初任者研修の提唱をまずあげたのが＜サンケイ＞、＜毎日＞、＜読売＞、の三紙である。また、＜朝日＞や＜日経＞は規制緩和とか自律精神など改革全体の理念に関係する見出しをまず掲げている。

もっとも、＜朝日＞や＜日経＞にしても見出しのトップには掲げなかったものの、初任者研修についてはサブの見出しで扱っており、この問題に各紙の関心が集まっていることがわかる。また、大学の入学時期や在学年数の弾力化など高等教育の改革の提唱についても、＜サンケイ＞をのぞく他の四紙が見出しにあげている。初任者研修と高等教育の改革が「概要（その3）」の中心的な内容とするらえていることが読み取れる。

第一次答申の際に見られた、内容を評価する見出しを掲げた紙はない。第一面の見出しは、「概要（その3）」の骨子と内容を具体的に伝えようとする表現になっており、見出しでは答申について評価を留保する姿勢が各紙に認められる。

② 連載の特集

朝日	なし
サンケイ	「実るか臨教審路線 中間経過の指針と展望」 (上) 初任者研修 教育者の多くは「必要」 (中) 問題教師が行く 問われる教委の在り方 (下) 大学らしい大学をめざして 学歴偏重の是正とは裏腹
日経	「教育改革21世紀への構図」 (上) 変わる象芽の塔 国立大の地盤沈下で危機感 (中) 生涯学習の場拡大 「有給制度」など企業支援必要 (下) 初任者研修実現へ 文部省の宿願だが、課題は個性の導重
毎日	「臨教審改革の焦点」 (上) 初任者研修制度 問題教師批判を突破口に (中) 高等教育 「科学技術立国」を主眼に (下) 教育基本法の解釈 「新目標」論議、土壌作り狙い
読売	なし

《解説》 上記の表は、「概要（その3）」に関して、連載の特集を組んだ各紙のテーマ及び見出しの一覧である。表にあるように特集を組んだのは<サンケイ>、<日経>、<毎日>の三紙である。

三紙とも共通して取り上げたテーマが、初任者研修と大学を中心とする高等教育の二つである。また、それとともに、<日経>は生涯教育、<サンケイ>は教師の任用を中心とする教育委員会制度、<毎日>は教育基本法を取り上げ、それぞれ「概要（その3）」の着目点に特色を出そうとしている。

「概要（その3）」のポイントが初任者研修と高等教育の改革にあるとする見方を三紙とも取っている。しかしながら、「概要（その3）」に盛り込まれた内容はそれにとどまるものではない。このあたりの配慮が三回のテーマの取り上げ方に出ているのではなかろうか。

初任者研修や高等教育の改革も確かに重要な課題であるが、「概要（その3）」はもっと広範な範囲で具体的な改革課題をあげている。この点について読者の関心を広げ、教育改革の全

体像を考えさせようとする姿勢も必要ではなかったのか。特集のテーマ設定にもう一工夫あってもよかったのではなからうか。

③ 「概要（その3）」の紹介

第一次答申の場合と同様に、「概要（その3）」の原文の一部をのせている。膨大な字数にのぼる「概要（その3）」のどの部分を取捨選択するか、そこにも各紙の特色が認められる。それにあてた頁数や紙面の構成などの点から見ると、＜サンケイ＞と＜日経＞は紙面の1/2頁をあててコンパクトにまとめたのせている。また、＜朝日＞、＜毎日＞、＜読売＞は2頁をさいて原文の紹介に努めるとともに、あわせて、関係の資料や論文説などをのせ紙面構成に工夫の跡がうかがれる。

④ 原文の紹介

そこで、＜朝日＞、＜毎日＞、＜読売＞の三紙を対象に「概要（その3）」について、どの部分を掲載し、また省略したか、その扱い方を整理してみる。下の表は、「概要（その3）」の章・節・項に対応させて各紙の扱いを示したものである。紙上の扱いが（略）とされている部分については、表においても「略」と記入した。また、たとえ一文でも原文が掲載されたところについては「○」印をつけた。

	毎 日	朝 日	読 売
第1章 21世紀に向けての教育の基本的な在り方			
1. 教育の歴史と現状の分析			
① 第一の教育改革と戦前の教育	略	略	略
② 第二の教育改革と戦後の教育	略	略	略
③ 教育荒廃の諸要因	略	○	略
2. 教育の未来展望			
① 社会・文化の変動の中長期展望	略	略	略
② 未来の教育の可能性と問題点	略	○	略
3. 21世紀に向けての教育目標			
① 教育の目的	○	○	○
② 21世紀に向けての教育の目標	○	○	○

第2章 生涯学習の機会の拡大 <省略>

第3章 高等教育の改革			
第1節 高等教育の改革			
1. 学部教育について			

	毎 日	朝 日	読 売
① 一般教育の在り方	○	○	○
② 外国語教育	○	○	略
③ 保健体育教育	略	略	略
④ 専門教育の在り方	略	○	略
⑤ 教育体制と教育方法	○	○	○
2. 学期等諸制度の柔軟化・開放化			
① 修学年限と単位	○	○	○
② 履習の形態	○	○	○
③ 学期と授業日数	○	○	○
④ 入退学および編入学	○	○	○
3. 大学の自己評価と大学情報の公開	略	○	略
4. 高等教育機関の多様化			
① 四年制大学	○	○	略
② 短期大学	○	略	略
③ 高等専門学校	○	○	○
④ 専修学校、各種学校、教育訓練機関	○	○	略
⑤ 放送大学および通信制大学	○	略	略
5. 設置基準およびその運用の見直し			
① 大学の設置と基準の維持	略	略	略
② 大学設置基準の見直し	○	○	略
③ 大学基準協会の活性化	略	○	略
④ 大学設置認可の見直し	略	○	略
⑤ 大学設置と大学政策	○	○	○
6. 大学院の充実			
① 大学院の現状とその拡大	略	略	略
② 修士課程の在り方	○	○	○
③ 博士課程の在り方	○	○	○
④ ポスト・ドクトラルフェローの強化	○	略	略
⑤ 学部と大学院	略	略	略
⑥ 学位の問題および学位授与機関	○	○	○
7. 学術研究の在り方	略	略	略
8. 高等教育機関の組織・運営の活性化	略	略	略

	毎 日	朝 日	読 売
第2節 高等教育の国際化			
1. 高等教育における国際的視野			
① 国際的内容の学習の強化	略	略	略
② 国際人の育成	略	略	略
2. 国際化の視点での高等教育の在り方			
① 教育の内容および方法の国際化	略	略	略
② 高等教育の制度面での改革	○	○	○
③ 外国人教員の任用	略	略	○
④ 日本人学生の留学および海外研修	略	略	略
⑤ 高等教育情報の公開	○	略	○
3. 留学生受け入れに関する諸問題			
① 留学生の類別化についての配慮	略	略	略
② 留学生のための奨学金等にかかわる措置	○	○	略
③ 留学生の宿舎の整備	○	○	略
④ 日本語教育の問題	略	略	○
⑤ 大学等における留学生受け入れの体制	○	○	○
⑥ 地域社会、民間と大学等との協力	略	略	略
⑦ 学位およびライセンスの問題	○	略	略
⑧ 法令、規程、慣習の柔軟化	○	略	略
⑨ 留学生に対するアフタ・ケア	略	略	略
⑩ 国の助成のあり方	略	○	○
4. 教員および研究者の交流			
① 教員・研究者の海外留学および派遣	○	略	略
② 外国人研究者の受け入れ	略	略	略
③ 大学協定と大学間交流の推進	略	略	略
④ 学会活動、学術情報の国際化	略	略	略
⑤ 学術の国際交流および国際協力	略	略	略
⑥ 学術国際交流事業の振興と充実	略	略	略

第4章 初等・中等教育の充実・多様化			
第1節 教育内容の基本的在り方			
1. 教育内容等の改善の視点	○	略	略

	毎 日	朝 日	読 売	
2. 教育内容等の改善の方向				
① 基礎・基本の修得と教育内容の精選	○	略	○	
② 個性の重視と教育内容・指導方法の多様化	略	○	○	
③ 学校間等の接続・連携	○	○	○	
④ 開かれた学校教育活動	略	○	略	
3. 徳育の充実				
① 基本的生活習慣，規範意識の指導の重視	}	○	○	
② 青年期における「生き方」の指導の充実		○	○	
③ 体験学習等の機会の充実・拡大		一括して	○	略
④ 小・中学校の特設道徳の再検討		○	略	
4. 教科の内容				
① 小学校低学年の教科の構成	}	○	○	
② 中等教育段階		一括して	○	○
③ 健康教育の重視		略	略	
5. 教育内容にかかわる制度の運用上の問題	○	○	○	
第2節 学校制度	○	○	○	
第3節 スポーツと教育	略	略	略	
第4節 学級編成など教育諸条件				
1. 小・中学校				
① 学校規模の適正化	}	○	○	
② 学級編成および教職員定数の改善		○	○	
③ 施設，設備の整備		一括して	略	○
2. 高等学校		略	略	

第5章 教員の資質向上			
1. 現状の問題点	略	○	略
2. 教員の資質向上の基本的在り方	略	○	略
3. 教員の資質向上のための具体的方策			
① 採用方法の改善と採用手続きの早期化	○	○	○
② 初任者研修制度の創設	○	○	○
③ 現職研修の体系化	○	○	○
④ 社会人の活用	○	○	○

	毎 日	朝 日	読 売
⑤ 教員の意欲，自己啓発の奨励方策	略	○	○
⑥ 大学における教員養成の充実・多様化	○	○	○
4. その他	○	○	○

第6章 国際化への対応 <省略>

第7章 情報化への対応 <省略>

第8章 教育行財政の見直し			
1. 教育行財政改革の基本的考え方			
① 教育に対する国の役割・責任の範囲	略	○	略
② 教育行財政改革の基本的考え方	略	○	略
③ 社会教育行政の見直しの基本方向	略	略	略
2. 教育における基準・認可制度の改革			
① 大学設置基準および設置認可制度等の改革	○	略	略
② 私学設置の自由の拡大	略	○	○
③ 学習指導要領等国の教育課程の基準の改訂	○	○	○
3. 教育における地方分権の推進			
① 教育行財政における国・都道府県・市町村役割分担の見直し	○	○	○
② 教育委員会の活性化のための諸方策	○	○	○
4. 学校の管理・運営の改善等			
① 学校の管理・運営の改善	○	○	○
② 秋季（9月）入学制への移項の検討	○	○	○
5. 教育財政の展望			
	○	○	○

《解説》 各紙とも高等教育の改革と初任者研修を中心とする教員の資質向上に着目していることは、第一面などにおける扱い方によっても十分に推測することができる。それに対応するように、第3章高等教育の改革と第5章教員の資質向上の部分については、各紙ともその紹介に努めている。もっとも、そこにも各紙によって若干の相違が見られる。すなわち、高等教育の改革の部分では、<朝日>と<毎日>にくらべて<読売>に省略が目立つ。また、教員の資質向上の部分では、<毎日>と<読売>に「略」が見られるのに対し、<朝日>は全体にわたってふれている。

一方、省略された部分についてであるが、高等教育の改革の部分でも高等教育の国際化になると省略が目立ち、各紙の扱いが冷淡になる。また、教育改革についての臨教審なりのとらえ方や理念

が述べられている第一章21世紀に向けての教育の基本的な在り方についての部分も省略が目立つ。ただ、「教育荒廃の諸要因」や「未来の教育の可能性と問題点」など、＜毎日＞や＜読売＞が省略する中で、＜朝日＞だけが扱い、この部分により紙面をさく姿勢が見られた。

おそらく、他の紙面と比較して、この頁にまで目を通す読者の数は少なくなるものと思われる。しかしながら、仮りに数は少なくなるにしても、教育改革について相当関心を持った読者の目にふれることになるであろう。それら読者に原典の内容を適切に伝えるためにも、その省略の仕方について慎重で細かな配慮が各紙に求められる。

⑬ 関連する資料などの掲載

「概要（その3）」の紹介とともに＜朝日＞、＜毎日＞、＜読売＞は、関連する資料、論説文、解説記事、などをのせている。それを整理したのが以下の表である。

朝日	<ul style="list-style-type: none"> ・天野郁夫論文「『概要』を読んで 注目すべき改革案 学校・教師性格づけ不足」 ・用語の解説（学校の設置基準，教員研修，学習指導要領） ・図「公立小，中学校の教諭，校長の年齢構成」 ・図「大学・短大卒業者の教員免許取得と教員就職状況」 ・図「教育荒廃－その原因・背景」
サンケイ	なし
日経	なし
毎日	<ul style="list-style-type: none"> ・臨教審の顔ぶれ ・年表「臨教審の歩み」 ・図「教員の資質向上策」 ・解説記事「9月入学制再び “水入り” 今後の議論に注目」 ・解説記事「『弁当の日』で給食弾力化 “家庭改革” が狙い」 ・解説記事「適性審構想に反発強く 答申盛り込み微妙」 ・解説記事「『全国化』はトーンダウン 放送大学の展開」
読売	<ul style="list-style-type: none"> ・臨教審委員，分科会名簿 ・解説記事「弁当の日，実現には異論も」 ・解説記事「くすぶる適性審論争」

《解説》 第一次答申の際には、潮木守一<日経>、西尾幹二<毎日>、天野郁夫<読売>の三氏の論説文が見られた。これに対して、今回は、<朝日>に「注目すべき改革案」というタイトルで述べられている天野郁夫氏の論説文が一本掲載されたのみである。第一次答申に際しての氏の論説文と比較して、とらえ方にやや変化が認められることに注目したい。

一方、<毎日>や<読売>は、臨教審内部における議論の様子や「弁当の日」など、話題にされながらも他の箇所では扱いきれなかった問題を囲み記事の形でのせている。また、<朝日>は、前回に続いて用語の解説を掲載したり、さらに統計資料を加えるなど、学校教育に関する資料の提供を重視した構成となっている。「概要（その3）」にある教育荒廃の要因図の紹介、用語の解説、論説文の掲載、など紙面の構成に変化をもたせた<朝日>の工夫が注目される。

④ 社会面の見出し

各紙の社会面の見出しを整理してみると、以下の表ようになる。

朝日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体罰教師の処分倍増 ・ 本社調べ 60年度はすでに40人 ・ 「監視の目強まり顕在化」 ・ 「初任者研修」反対なし 「適性審」賛成2県だけ 教育長への本社アンケート ・ 直視したい現場の沈滞 臨教審素案 専門家の声 	日経	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育多様なお模策 ・ 臨教審「審議経過の概要」 9月入学など先送り 「基本法」の扱い不明確 ・ 現場からの声 大学改革設置基準簡素化は歓迎 道徳教育価値観の押しつけ困る
サン	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師は全人格傾けよ ・ 臨教審の「中間報告」を識者に聞く 	毎日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「先生の先生」 ・ 「15歳大学生」
ケイ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 問題はやる気と思いやり ・ 春秋入学 弾力的な運用を ・ この子らのために 	読売	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夢も盛り込み大学改革 臨教審の審議経過公表 ・ 15歳入学→21歳博士も 独創時代、天才児に配慮 ・ 国際時代に備え 君は春、ボクは秋入学 ・ のびのび単位減 一般教育、より個性的に ・ 先生を教える「先生」 「人選」「位置づけ」は二人三脚、現場に反発も 文部省は大乗り気

《解説》 高等教育の改革や初任者研修などについて、読者の身近な言葉に置き換えて表現する工夫が認められる。〈毎日〉や〈読売〉には、「先生の先生」とか「君は春、ボクは秋入学」など、くだけた調子が見出しが認められる。今回の教育改革の理念や原則、また、各改革課題について、どこまでこのような表現に置き換えることができるのか興味のあるところである。

一方、第一次答申の場合と同様に、いわゆる「識者」とよばれる人々や教育現場の関係者などのコメントやアンケート調査をのせている。これらを通して「概要（その3）」に対する社会的反響を描き出す意図を認めることができるが、〈朝日〉、〈サンケイ〉、〈日経〉、などがその手法を取っている。ただ、第一次答申の際にも指摘したが、「識者」や「現場」の人に「概要（その3）」に目を通す時間的な余裕が与えられていたのか、少なくとも原文を読んだ上でのコメントなのか、いささか気になるところである。数名のコメントをならべて学校や社会の反響の一部として紙面をまとめてしまうことは、いささか安易に思われるのだが、いかなものであろうか。各紙それぞれ特色を出そうとしているが、社会面の構成については、もう一工夫あってもよかったように思われる。

⑤ 社説

「概要（その3）」について、最後に、社説を整理する。各紙が「概要（その3）」に対して主張した主な点を抜き出してまとめたのが次の表である。作表の要領は第一次答申の場合と同様である。

《解説》 「概要（その3）」に対する全般的な評価について、最も肯定的なとらえ方をしているのが〈日経〉である。逆に、批判的なとらえ方をしているのが〈毎日〉であり、「臨教審の逐次答申の方針は誤っていた」とまで言い切っている。一方、両紙の中間に位置するのが〈朝日〉、〈サンケイ〉、〈読売〉、の三紙である。この三紙、ある部分については肯定し、また、ある部分については否定する書き方をしている。たとえば、〈朝日〉と〈読売〉は、「概要（その3）」の第一章でのべられていることに賛成しつつも、他の章との整合性に欠けると批判する。また、〈サンケイ〉と〈読売〉は、改革の全体像が見やすくなってきたと評価する一方で、改革の方向や具体的課題の深り下げについて明確化を要求する。

ところで、最も批判的な立場に立つ〈毎日〉も「（第一章）の言葉自体に異論はない」とのべたり、また、〈朝日〉が「最も注目されるのは、第一章『21世紀に向けての基本的な在り方』である」と指摘するなど、〈サンケイ〉をのぞく各紙が「概要（その3）」の第一章に注目し、そして、賛意を示している。しかし、いかなる点に賛成で異論がないのか、一応の記述はなされているものの踏み込んだ説明が不足している。「概要（その3）」全体に目くばせをしてコメントを加えるため、どうしても社説の展開に深まりが欠けている点是否定できない。限られた字数の中で章を追いながらコメントを加えていく手法は、あまり適切な方法ではなかったのではないか。「概要（その3）」の分量の多さに社説もふりまわされた感がある。

それにしても、各紙の主張に類似の点が多く見受けられる。＜日経＞の社説に他紙に見られない独自の主張を認めることができるが、他の四紙、とりわけ＜サンケイ＞をのぞく三紙は、表現のニュアンスは異なるものの、言わんとしているところは共通している点が少なくない。「概要（その3）」について各紙それぞれが独自性をより発揮し、もっと独自の読み方や主張ができなかったのか、いささか不満が残るところである。

	＜朝日＞ 「臨教審にはしい姿勢の一貫性」	＜サンケイ＞ 「臨教審報告に四つの注文」	＜日経＞ 「当面より中長期を展望した臨教審」	＜毎日＞ 「整合性を欠く臨教審の概要」	＜読売＞ 「臨教審の第二次答申に望む」
評価点	「第一章における臨教審の主張は基本的に賛成」	「全体としてみれば深みと厚みを増してきた」	「教育基本法をめぐる不毛の論争はほどほどにしようという臨教審の姿勢は支持してよい」 「『歴史は歴史として不毛な対立に終止符を打ち、信頼を回復したい』とのべている。肯定できる見方である。」	「（第一章）の言葉自体に異論はない」	「改革の全体像が見通しやすくなってきたことは評価すべき」 「第一章の展開、現状、未来、展望に関する文明的分析は妥当」
（批判点）	「章によってムラがあり一貫性に欠ける」			「教育の目標が、その他の実践テーマとどう関連するのかよくわからない」 「教育の目的との関連では小・中・高校から大学までの総合的な改革になっていない点に不満がある」	「第一章の基調と他の章のさまざまな具体的提言と十分な整合性をもっと結びつけることが最も大切」
（要望点）		「教育の現状について実証の裏打ちがほしい」 「改革の具体的方向を示してほしい」	「公財政支出教育費答申で確認した方がよい」	「教育改革の拙速は禁物」	「教員研修、実証的な現状分析が必要」 「教員研修実施の具体的方策をより説得力あるものにする必要」 「教育目標はもう少し練る必要」 「高等教育改革、一層の強化を望みたい」
組織・運営に対して	「会の組織、議論の進め方について再検討を」	「互いの縄張り意識を捨て協力して一つの案に」 「第二部会の要求を各部会は受け止めよ」		「臨教審の逐次答申の方針は誤っていた」	

4. 作業を通してのコメント

すでに指摘したように、第一次答申に対しては改革像の不明瞭さや審議の進め方に各紙の批判的姿勢が目立った。一方、「概要（その3）」に対しては、教育改革の理念や原則について述べられた第一章については各紙とも評価する態度を示している。そして、第一章と具体的な改革課題との関係に関心がそそがれ、その不整合に批判の目が向けられている。また、教育改革の方向や全体像の明確化の要求や、臨教審の組織や運営方法についての注文が見られる。

第一次答申と「概要（その3）」に対する新聞資料を整理したが、最後に、二点コメントを加えておきたい。

- ① 読者の素朴な問題意識に答える報道であったか。第一次答申や「概要（その3）」に盛り込まれた内容が実際に進められると、自らの身边にどのような影響が出てくるのか、具体的にどう変化するのか、まずはこのあたりに読者の関心があるのではなからうか。これに対応するためには、教育改革の将来像や実現の可能性について大胆に予測していくことも必要とされる。教育改革の将来を展望し、具体像を描く、長期的な視野が各紙にも求められている。
- ② 求められる具体的な提言。今後の教育改革の成否をうらなう上で新聞各紙の存在を無視することはできない。新聞によって作り出される「世論」は、国民の教育改革認識にも多大な影響を及ぼすことが考えられる。第一次答申に際して、＜毎日＞の社説は「臨教審がさしたる成果を生まずに終わった場合、教育改革の動きそのものが止まってしまうことをおそれる」とのべているが、教育改革の展望に対して新聞各紙が負わねばならない責任もまた大きいと言わざるを得ない。

このような点をふまえるならば、新聞各紙には答申などを単に批判的に論じるだけでなく、それを乗り越えた提言をしていく努力も求められる。もっとも、それを可能とするためには、各紙それぞれに教育改革をとらえる冷静な目と長期的な展望が不可決であることは言うまでもない。

なお、本稿では、第一次答申と「概要（その3）」について新聞資料を整理する作業を行ったが、さらに、これから出される第二次答申についても同様の作業を進める予定にしている。